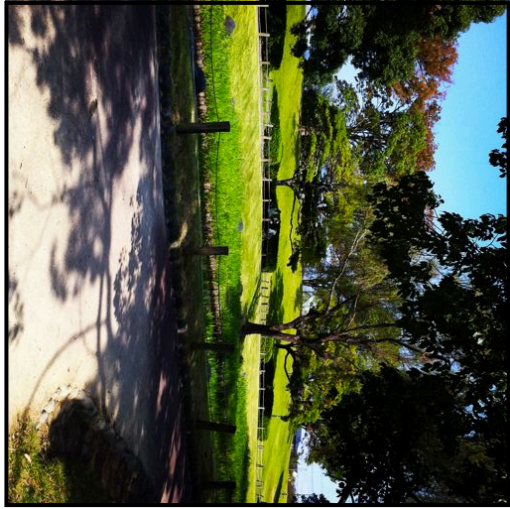


「盆休み」

幽霊が出るという噂の校舎もさすがにお盆は静かだった。帰省しないものが校庭に集まり花火をする。「今年はおいつが成仏しやがったな」「嫌いだっただのくたぼったからなあ」「あれは？」「初恋の人が結婚したから気がすんだって」「初恋の人が結婚したから気がすんだって」なんだかこの業界もいろいろあるらしい。



添鳥文庫

ネコと僕。

「パン」

人間から教わったパンがとても美味しかったので、どうパン屋さんを始めてしまいました。ただ誰も見れないものはなかなか売れません。「こんなに美味しいのに」「そこででは珍味とされる人間の形にしてみました。そうして店に置いたところ瞬く間に売れるではありますんか。

「ハムルン」

不思議な音に誘われて中年男がぞろぞろとついでにいきます。街を一回りする頃には一人もいなくなっていました。残されたものにとってはどうでもいいことでした。なんの役にも立たない中年男がいなくなっただけですか。この際イケメンだけになればいいのにといい出す始末です。

「ネコと僕」

箱につめられたネコが川を流されていた。少しだけ出した顔は助けての言葉を知らないようだった。砂防ダムに引っかかってそのまま沈んでいきそうだったから僕は泳げなかったけど助けた。持っていたパンと公園の水をやると小さく

にゃあ、

と鳴いた。僕たちはそれ以来友達になった。

もういいだろう。もうそろそろ僕のことなんか忘れなよ。

らしいが宛先不明で返した。暑中見舞いが来ていた今年も君にはメールしなかった。ぼんやり歩いていただけでもないが、よく見てみると両手でも足りないくらいの数が飛んでいた。

夕方の暑さのひいた空、目の前をどんぼが横切る。ぼんやり歩いていただけでもないが、よく見てみると両手でも足りないくらいの数が飛んでいた。

「宛先不明」

れんのか。なにした。とか、どこ行ったとか、なに食ったとかさ。忘

かなあ。顔見てもわかんなくなるくらい変わってさ、忘れんのさ、卒業してさ、進路もバラバラで、会う回数も減ってって笑ってなんかすげー楽しいじゃん？

「いつかは」

彼は何も知らずに歌う。いくら美味いからといって乱獲しすぎたのだ。彼を飼う生物はため息をつく。

最後の個体として保護されていたが、もう時間の問題だろう。彼がいなくなれば人類は絶滅する。誰もいない世界へと挨拶をする。朝起きておはよう。夜眠るときはおやすみ。「絶滅危惧種」